

精神疾患をもつ保護者とその子どもたち：
子どもの「主体」と「語り」からのアプローチ

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畠垣, 智恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000332

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02481

研究課題名（和文）精神疾患をもつ保護者とその子どもたち—子どもの「主体」と「語り」からのアプローチ

研究課題名（英文）Parents with Mental Illness and their Children - Approaching from the Child's Proactive Narrative-

研究代表者

畠垣 智恵（HATAGAKI, CHIE）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60436988

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究の目的 精神疾患を抱える保護者をもつ子どもへの支援ガイドライン作成。2018年～2019年に日本とフィンランドで収集したメンタルに関する論文が国際雑誌に採択された。この論文は学齢期の子どもが感じる主観的幸福感と学校適応、家庭関係の良好さとの関連について明らかにした。研究の目的 精神疾患を抱える保護者をもつ子どもへの支援について、本邦の精神科医療、保健福祉領域における現状を明らかにする。この分野は、近年、ヤングケアラーという名のもとで実態調査が行われつつあるが、定義や範囲はなお曖昧なままである。当事者を中心とした地道な活動や一部の医療・福祉関係者の理解に留まっており支援提供の前段階にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本とフィンランドの小・中学生を対象におこなった調査から、学校適応と家族関係の良好さは子どもの主観的幸福感に関連しており、また、学校適応と学校満足度は家族関係の良好さにも関連していることが明らかになった。家族関係が安心できるものであることが子どもを学校へと送り出す基盤となり、友人関係作りを支えていると考えられるため、どちらかを一方で代替することは不十分であると言える。医師は当然ながら親の精神疾患の治療と支援を主軸にしており、子の存在には気が付いており心配はしているものの、子が未成年であれば親の治療に参加させることに躊躇する、方法が分からない、多忙さゆえに対応が困難という現状が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Purpose of the study (1) Creation of guidelines for supporting children with parents with mental illness. A paper on mental collected in Japan and Finland in 2018-2019 was accepted for publication in an international journal. This paper clarified the relationship between subjective well-being as perceived by school-aged children, school adjustment, and good family relationships.

Purpose of the study (2) To clarify the current situation in the field of psychiatry and health and welfare in Japan with regard to support for children whose parents have mental illness. This field has recently been surveyed under the name of "young caregivers," but the definition and scope of the term remain vague. The field is still in the preliminary stage of support provision, with only steady activities led by the parties concerned and the understanding of some medical and welfare professionals.

研究分野：臨床心理学、発達心理学、児童福祉、母子保健

キーワード：親の精神疾患 ヤングケアラー 精神科受診 子の治療参加 子どもの主体性 精神医療 地域医療

1. 研究開始当初の背景

研究者自身が精神科および児童精神化に臨床心理士として勤務した経験から、精神疾患を抱える成人の治療において、診察室やカウンセリングルームの「外に置かれた子どもの存在」に着目した。患者は、診察室を一步出ると、「親」「家族の成員」となるが、親の受診に同行し、診察に同席する子どもは極めて少ない。子どもには知らせるべきではない、巻き込んではいない、と考えられているかのようである。精神疾患の症状として、時に感情が激しく上下し、体が全く動かない日もあり、逸脱した言動を取ることもある親を家庭内で目の当たりにしている子どもはどのような体験をしているだろうか。

児童虐待の文脈で理解することもできるが、アルコールや薬物の問題を抱える親からの虐待とは異なった子への影響があるのではないだろうか。また、近年、注目を集めるようになったヤングケアラー（本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども（厚生労働省、2020））の中にも含まれるものではあるであろうが、しかし、身体の病気や障害をもつ親やきょうだいの介護や家事を担わされることとは質的に異なっているのではないか。

2. 研究の目的

研究の目的(1) 精神疾患を抱える保護者をもつ子どもへの支援ガイドライン作成

家族の一員として、また子どもを主体として見て、自分の考えや気持ちを語ることの出来る存在として位置づけていくべきであるという考えに基づき、精神科医療・福祉の現場において、子どもが親の精神科治療にいかに参加しうるのかについて調査を行う。

研究の目的(2) 精神疾患を抱える保護者をもつ子どもへの支援について、本邦の精神科医療、保健福祉領域における現状を明らかにする

患者が子どもをもつ保護者であった場合に、現状では、その治療・支援はどのようになされているのか？各種相談機関や専門職（医師、精神保健福祉師、臨床心理士、保健師等）の間で子どもに対してどのようなアプローチがなされているのか？インタビュー調査により明らかにする。

3. 研究の方法

・静岡大学「ヒトを対象とした研究倫理委員会」に研究計画書を提出し、精神科医療に関わる専門職や患者本人、当事者である成人した「子ども」へのインタビューを行う。

・学内倫理委員会の承認を経て、国内（愛知、静岡、東京）の精神科医療・福祉に従事する専門職（精神科医師、児童精神科医師、精神保健福祉師、ソーシャルワーカー、臨床心理士など）を対象に30程度のインタビューと200名程度のアンケート調査を行う。

・フィンランドにおいて、同様の専門職へのインタビュー調査を10名程度に行う。

・国内において、成人になった当時の「子ども」当事者15名程度を対象に、回想に基づくインタビュー調査を行う。

・児童期、思春期、青年期、とその年齢で感じていた思いや葛藤、親との関係の変化、自身の就職や将来へにどのような影響があったかについてインタビューを行う。

*2020年2月～2023年3月の間、Covid-19の影響により、本研究は一時中断、大幅な研究対象者と方法の変更を余儀なくされた

4. 研究成果

<こころの病気を抱える親をもつ子ども>のハンドブックと<こころの病気を抱える親>のハンドブックの著者である Titti Solantaus 博士のグループ研究と実践について資料収集を行った。また、こころの病気を抱えている親、子ども、家族の支援方法としてフィンランドで広く用いられている「Let's Talk」について、実際にフィンランドの家庭支援センター（ネウボラ）カウンセリングルーム、就学前教育においてどのように用いられているか調査を行った。結果、保育や教育の現場においては、「こころの病気や問題をもつ親やその家族を対象として取り出して支援をするのではなく、すべての子ども達は語りたい何かを持っており、何らかの支援ニーズを持っているという前提に立って、ガイドラインを子どもへの日々のかかわり方に活かしていくという柔軟な利用がなされていた。

2018年～2019年に日本およびフィンランドで収集したメンタルに関する論文が国際雑誌に採択された。この論文は学齢期の子どもが感じる主観的幸福感と学校適応、家庭関係の良好さとの関連について明らかにしたものであり、本課題の目的(1)に資する基礎研究になると考えられる。

さらに、その研究においては、日本(474名)、モンゴル(121名)、フィンランド(247名)に住む小学4年生から6年生までの合計842名(平均年齢11.01歳、SD=1.05、有効率97.34%)を対象に、子どもにおける幸福の文脈的定義を明らかにした。文章完成法を用いて、子どもの幸

福度の定義を調査した結果、モンゴルの子どもの幸福は家族関係についての言及によって特徴づけられていた。フィンランドの子どもたちの幸福は、物事への自律的な関与、個人的な達成、成功と関連していた。日本の子どもたちの幸福は、楽しい経験と不快な経験の違いによって大きく特徴づけられており、「叱られること」について言及することが多く、幸福感は学校での成功とは関連していなかった。これらの結果は幸福を判断する新たな基準としてのSeligman (2012)の「Flourish」という概念の要素と一致した。幸福の主たる要素は、国や文化によって異なる可能性があることが示唆された (Ninomiya, Y., Matsumoto, M., Nomura, A. et al. 2020)。

研究の目的(2) 精神疾患を抱える保護者をもつ子どもへの支援について、本邦の精神科医療、保健福祉領域における現状を明らかにする

NPO法人プルサル八等が主催するオンライン研修会に参加し、日本およびフィンランドにおける支援体制に関する情報収集とネットワーク作りを行った。この分野は、近年、ヤングケアラーという名称のもとで実態調査が行われつつあるが、ヤングケアラーの定義や範囲はなお曖昧なままである。当事者を中心とした地道な活動やごく一部の精神科医師、看護師の理解に留まっており、支援の提供の前段階にあると言える。

日本およびフィンランドの小・中学生を対象に行った調査から、学校適応と家族関係の良好さは子どもの主観的幸福感に関連しており、また、学校適応と学校満足度は家族関係の良好さにも関連していることが明らかになった。家族関係が安心できるものであることが子どもを学校へと送り出す基盤となり、友人関係作りを支えていると考えられるため、どちらかを一方で代替することは不十分であると言える。

県内医療機関に従事する保健師と臨床心理師計5名にインタビュー調査を行った。小児科や児童精神科の場合には、子ども自身が患者であるが、その親もまた何らかの精神的問題を抱えていることがある。その場合には、親子の相互影響を考慮しながら支援にあたっているが、具体的な支援については、「特にない」「診断名に配慮して(伏せて)子に伝える」などが挙げられたが、しかし、ほとんどの場合は、親の困難な状況については子に伝えない専門職が多いことが分かった。医師は、当然のことながら、親の精神疾患の治療と支援を主軸にしており、子の存在には気が付いており心配はしているものの、子が未成年であれば親の治療に参加させることには躊躇する、方法が分からない、多忙さゆえに対応が困難という現状が明らかになった。親の診察に子が同行する事が少ないことも理由として挙げられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yuki Ninomiya, Mariko Matsumoto, Asuka Nomura, Lauri Kempainen, Soili Keskinen, Chie Hatagaki	4. 巻 14
2. 論文標題 A Cross-cultural study of happiness in Japanese ,Finnish and Mongolian Child: Analysis of the Sentence Completion test	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Child Indicators Research Published online	6. 最初と最後の頁 871-896
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 畠垣智恵	4. 巻 48
2. 論文標題 精神発達検査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 1069-1074
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 畠垣智恵
2. 発表標題 学校臨床におけるアセスメントの活用と限界 ICD-11における疾病・障害と特別支援教育
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroko Tsuboi, Chie Hatagaki
2. 発表標題 An internathional comparison in Happiness in foreign children in Japan: Japanese, finnishi and Mongolian children(1)Analysis of Happiness scale
3. 学会等名 18th Internaiional Cogress of ESCAP（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Asuka Nomura, Chie Hatagaki
2. 発表標題 An internathional comparison in Happiness in foreign children in Japan: Japanese, finnishi and Mongolian children(2)Analysis of the Sentence Completion Test on sence og Happiness
3. 学会等名 18th Internaional Cogress of ESCAP (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuki Nlnomiya, Chie Hatagaki
2. 発表標題 An internathional comparison in Happiness in foreign children in Japan: Japanese, finnishi and Mongolian children(3)Analysis of the Sentence Completion Test on sence og Unhappiness
3. 学会等名 18th Internaional Cogress of ESCAP (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------